

「凌霄花」と石盤

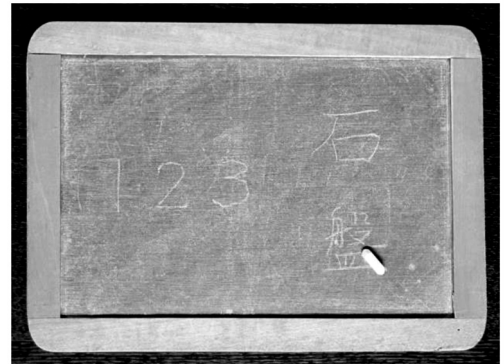
山田 功

寺田寅彦の作品「花物語」の中に「凌霄花(のうぜんかずら)」という短編がある。寅彦が子供の頃、夏休みに苦手な算術を中学校の先生の家で教わりに行ったことが元になっている。

主人公の子供は、暑い夏の昼前、石盤を抱えて先生の家に行く。今ではこの石盤を知っている人は少ないに違いない。それは、丁度 B5 判の用紙と同じ大きさの黒い粘板岩(slate)の板で、周りを木で縁取りがしてある。小さな黒板と言ったらいいだろう。チョークに当たるのは石墨である。これで黒い石盤に白い文字が書けるのである。書いた文字はラシャ切れを丸めた石盤拭きで消える。

主人公は石盤の上で石筆をコツコツいわせて算術の問題を考える。石の石盤と石墨が当たる音である。こうした情景を理解するには、石盤があるとよい。

我が家には、伊勢湾台風の前まで小屋の中にあっただが、今はない。記憶の確認のため、近くの博物館へ出かけた。戦前の教育状況を紹介するコーナーにそれは私の記憶のまま展示してあった。そこにあっ



たパンフレットで、写真も入手できた。だが物足りない。実物が欲しくなった。そこで、名古屋大須の骨董市に出かけてみたが残念ながら見つからなかった。

そんなある日、愛知県扶桑町にある「教科書資料館」を久しぶりに訪ねた。親しく話をしたご主人は、数年前に亡くなられ、今は奥様が残されたたくさんの資料を管理しておられた。ここの資料は、ご主人があちこち蔵のある家を訪ねて集めてきた、古い教科書類である。私設の小さな資料館であるが、この世界では有名で、大学の研究者や、テレビ局、新聞社、映画製作者等が古い教科書を求めて全国からやってくる。今回は、「凌霄花」に出てくる「算術の例題集」を調べるのが目的であった。ほぼそれであろう本も見つかり、そろそろ帰ろうとして、何気なく奥様にお聞きした。「石盤を探しておりますがそんなものはありますかね。」と。そうしたら奥様は展示室の生徒用の机の物入れから取り出し「これですかね。」と言われた。「それです。それです。」と私は声を高くして言った。思いもかけず石盤が教科書資料館にあったのである。考えてみれば、ここには教科書だけではなく掛図も小型オルガンも木製の学校机もある。石盤があっても不思議ではない。「そんなにお探しなら、これを持って行きなさい。」と軽く言われた。私は驚き、何度も「いいんですか。本当にいいんですか。」と聞き返した。こうして今、石盤は私の手元にある。いつか、「凌霄花」について、お話しをする機会があれば、この石盤を見ていただいて、話しができる。そうすれば、「凌霄花」をきっと深く理解してもらえることだろう。石盤はこの小説の大切な小道具なのである。